



Meri Ogai Gedenkstätte

目次

- 次回展示のお知らせ
文京区立森鷗外記念館新収蔵品展
- 展示会場から
- 特集
「ベルリン森鷗外記念館30周年を記念して」
ベアーテ・ヴォンデ(ベルリン森鷗外記念館副館長)
「東独時代の鷗外記念館」
加賀乙彦(文京区立森鷗外記念館名誉館長)
- コラム
「鷗外、流行へのまなざし」
宗像和重(早稲田大学教授)
- 展示報告
特別展「流行をつくる—三越と鷗外—」
- 地域情報
これからの催しもの 2015年1月~3月
- 編集後記

*1月7日(水)必着

1月18日(日) 14:00 ~ 15:30
鷗外誕生日記念講演会「博物館長時代の鷗外—晩年の業績—」

講師: 田良島哲氏 (東京国立博物館学芸研究部調査研究課長) 鷗外の誕生日を記念して、帝室博物館(現・東京国立博物館)総長時代の鷗外について、同館の田良島哲氏をお迎えし、お話しできます。

会場: 講座室
料金: 500円
定員: 50名

*1月31日(土)必着

2月14日(土) 18:00 ~ 19:00
朗読会
『最後の一句』を読む

朗読: 北原久仁香氏(ナレーター・かたりと)
会場: モリキネカフェ
料金: 600円(お茶付)
定員: 20名

夜のカフェでお茶を飲みながら朗読を楽しみます。


*2月20日(金)必着

3月8日(日) 14:00 ~ 16:30
新・観潮楼歌会
5人の歌人による公開歌会 II

歌人: 大松達知氏、東直子氏、穂村弘氏、望月裕二郎氏、山崎聡子氏
会場: 講座室
料金: 500円
定員: 50名

5人の歌人による歌会を楽しみつつ、参加者も気に入った歌に投票していきます。

前回の公開歌会の様子



展示編◎ / 講演会編 *2月7日(土)必着

〈展示編〉2月16日(月)~22日(日) / 〈講演会編〉2月22日(日)

新・観潮楼歌会 文京建築探訪 ご近所のぜいたく空間“銭湯” (展示編) / 文京建築探訪 (講演会編)

文豪たちも通った地域のサロン“銭湯”の魅力と、その現代における価値を、展示と講演で探っていきます。

〈展示編〉10:00 ~ 18:00
ディレクション: 文京建築会コース
会場: モリキネカフェ 他
料金: 無料

〈講演会編〉14:00 ~ 15:30
ディレクション: 文京建築会コース+林丈二氏(路上観察家)
会場: 講座室
料金: 500円 定員: 50名

◆◆文京区立森鷗外記念館イベントの申込方法◆◆

事前申込制のイベントは、各申込締切日までに下記のいずれかの方法でお申込みください。申込みは、1通につき1名様(はがき・Eメールどちらかお一人様1通まで、親子プログラムおよび親子向け推奨のプログラムに関しては親子一組につき1通)、応募者多数の場合は抽選とさせていただきます。申込締切後1週間以内に抽選結果をお知らせします。

- ①往復はがき 往信に参加希望プログラム名・日程・氏名(ふりがな)・住所・電話番号を、返信用には、住所・氏名を明記の上、〒113-0022 東京都文京区千駄木1-23-4 文京区立森鷗外記念館イベント係までご応募ください。 ※日中に連絡が取れる電話番号をご記入ください。
- ②Eメール 件名に参加希望プログラム名・日程・本文に氏名(ふりがな)・Eメールアドレス・電話番号を明記の上、bmk-event@moriogai-kinenkan.jpまでご応募ください。 ※参加可否のご連絡をEメールでいたします。当館からのEメールが受信可能なEメールアドレスをご記入ください。受信制限が設定されている場合、当館からのEメールを受け取れないことがありますので、あらかじめご確認のうえ送信ください。 ※日中に連絡が取れる電話番号もしくはEメールアドレスをご記入ください。

[ご提供いただきました個人情報は、個人情報保護に基づき適切に管理し、当該プログラム以外の使用はいたしません。]

編集後記

木々が色づき始め、夜風が冷たくなってきた11月半ば、今年も「森鷗外記念館で現代アート! vol.2 生命の連鎖・イメージの連鎖」に関連したイベントが開催されました。

11月14日に行われた山田せつ子氏・金大偉氏・松田弘之氏の「ダンスと音楽と映像によるパフォーマンス」は、館全体を会場とする大胆なもの。展示室内で踊る山田氏のライブ映像が展示導入室に投影され、やがて現れた山田氏本人の姿が重なります。館内に響く松田氏演奏の能管の音が、観客を異空間へと導いていきました。

翌日は、金大偉氏によるライブ『Deep Circulation』を記念館エンターランスで開催。鷗外のレリーフ、作間敏宏氏の作品をバックに、金氏が力強くキーボードを演奏しました。おごそかな雰囲気のものや軽快なリズムのものなど、全10曲の多彩な曲が演奏され、音楽に誘われて会場は超満員に。ゲストの倉林靖氏によるリコーダー演奏も好評でした。外壁に投影されているインスタレーション作品『Spiritual Harmony』とも相まって、記念館全体を金氏の世界感が包み込みました。

記念館では2015年もさまざまなイベントの開催を予定しております。チラシやHPで随時お知らせしていきますので、是非ご覧の上ご参加ください。

交通案内



- 電車をご利用の場合
 - ・東京メトロ千代田線「千駄木」駅1番出口徒歩5分
 - ・東京メトロ南北線「本駒込」駅1番出口徒歩10分
 - ・都営三田線「白山」駅A3番出口徒歩15分
 - バスをご利用の場合
 - ・都バス63番系統「千駄木一丁目」下車徒歩1分
 - ・都バス上58番系統「団子坂下」下車徒歩5分
 - ・B-ぐる千駄木・駒込ルート「18 特別養護老人ホーム千駄木の郷」下車徒歩5分
- ※一般の駐車場がございませんので、公共交通機関をご利用ください
- 〒113-0022 東京都文京区千駄木1-23-4 TEL: 03-3824-5511
URL: <http://moriogai-kinenkan.jp>

開館時間 10:00 ~ 18:00 (最終入館は17:30)

休館日 毎月第4火曜日(祝日の場合は開館し、翌日休館)、年末年始(12月29日~1月3日)、及び展示替期間、燃焼期間等

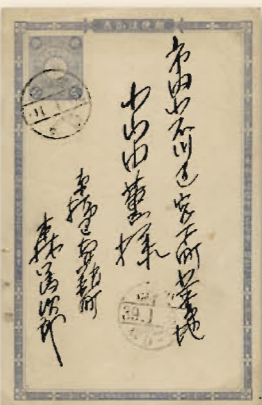
展示のお知らせ

文京区立森鷗外記念館新収蔵品展

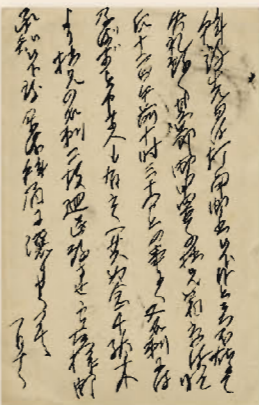
パート1 新収蔵品にみる鷗外の横顔
パート2 森類の生涯―ボンチコから作家へ

会期 2015年 1月29日(木)―4月19日(日)
【パート1：1月29日(木)～3月9日(月)】
【パート2：3月11日(水)～4月19日(日)】
※会期中の休館日 2月23・24日(月・火)、3月10日(火)、24日(火)
会場 文京区立森鷗外記念館 展示室2
開館時間 10時～18時(最終入館は17時半)
観覧料 一般300円(20名以上の団体：240円)
※中学生以下無料、障がい者手帳ご提示の方と同作者1名まで無料
※文京ふるさと歴史館入館券、パンフレット(押印入)、友の会会員証ご提示で割引
※その他各種割引がございます。詳細は記念館HPをご覧ください。

森鷗外遺筆 小山内重寛はがき



【表】



【裏】

ギャラリートーク

展示室2にて当館学芸員が展示解説を行います。
2015年2月11日、25日、3月11日、25日、4月8日(いずれも水曜日)
各回14時～(30分程度)
申込不要。展示観覧券が必要です。

陸軍軍医監時代集合写真



同時開催

文の京ゆかりの文化人顕彰事業
ミニ企画

「佐藤春夫」

―葉がくれに沙羅の花咲き―

「石川啄木」

―観瀾楼の門をくぐった若き歌人―

江戸時代より、文京区には幕府直轄の昌平坂学問所をはじめ、藩校や私塾などが集まってきました。明治に入ると、東京大学の開校をきっかけに、近代教育の発祥地として多くの大学や学校ができました。現在でも、区内には100校もの国・公・私立の小・中・高校・大学が存在します。

また文京区は、多くの学者や芸術家が暮らした街としても知られており、区内には、こうした人々の足跡が数多く残っています。文京区ではこれらを文化遺産として顕彰し、後世に伝えていきます。森鷗外記念館では、その中でも文人、佐藤春夫と石川啄木にスポットをあてて紹介します。

会期 2014年11月29日(土)
―2015年3月9日(月)―
※会期中の休館日 12月24日(水)、12月29日(月)～1月3日(土)、1月26日(月)～28日(水)、2月23・24日(月・火)

会場 文京区立森鷗外記念館 展示室1
※いずれもコレクション展開催中のコーナー展示です。



文京区立森鷗外記念館では、主に、原稿・書簡・図書・遺品などの鷗外資料と、鷗外や文京区にゆかりのある、文学や文学者に関連する資料を収集しています。

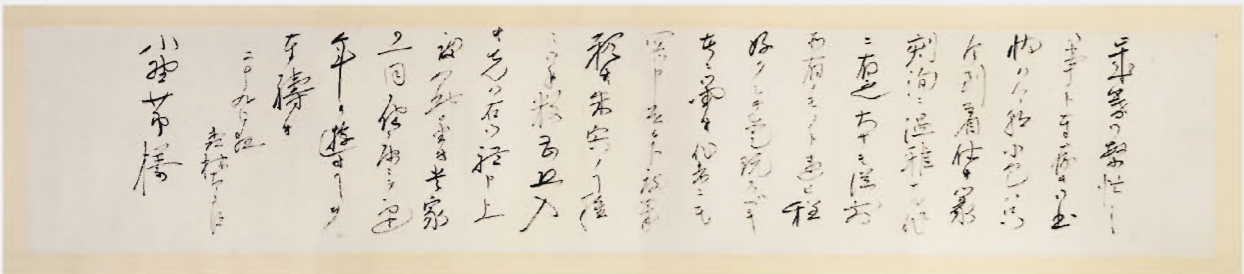
購入、寄贈などにより収集した資料は、展覧会などで展示・公開するほか、近代文学史を知る補助資料や、研究の対象としても活用されます。これらの資料を整理し、適切な環境で保管し、後世に伝えていくことは文学館の重要な役割のひとつです。

このたび、当館では初めての「新収蔵品展」を開催いたします。本展は、会期を二期に分けて、パート1では、2012年11月の開館から2014年3月までの間に新しく収集および、修復をした資料を鷗外の業績とあわせて紹介します。書簡、絵画、写真などバラエティ豊かな資料からは、鷗外の多彩な活躍を知ることができます。

パート2では、鷗外の三男・類の生涯を、ご遺族よりご寄贈いただいた初公開の類旧蔵資料とともに紹介します。父・鷗外を敬愛しながらも、自らを「不肖の子」と称して鷗外の威光に苦悩した類。自筆原稿や書簡などを眺めてみると、作家、書店「栄書房」主人など、個として生き抜いた類の姿が浮かび上がってきます。

本展覧会を通じて、文学館事業の一端をご理解いただくとともに、知られざる鷗外の顔をご覧ください。

展示会場から



鷗外筆 小野節宛書簡

大正5年12月29日付

[401027]

【翻刻】

歳暮御繁忙之
御事ト奉存候御書
状ハ今朝小包ハ只
今到着仕候蒙
刻洵ニ温雅ナル作
二有之大サモ従前
所有ノモノト違ヒ程
好クシテ愛玩スベキ
者ニ御座候作者ニモ
宜御申遣被下度奉
願候朱六ノ事種
々御手数甚恐入
候先ハ右御禮申上
度如此御座候貴家
御一同御健康ニテ迎
年被遊候事ヲ
奉禱候

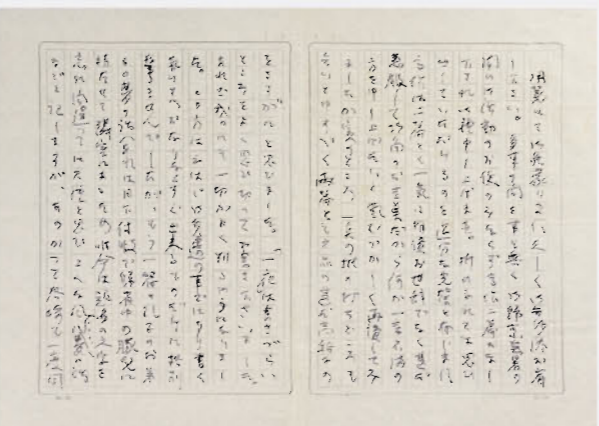
二十九日付

森林太郎
小野節様

岡山の歌人・小野節から届いた書簡と小包への礼状です。贈られたのは印章だったことが「篆刻洵ニ温雅ナル作」からわかります。印章の側面に彫られた制作年や、刻印者・奥村竹亭(直康)と小野が知己だったこと、前月11月9日に小野が鷗外を訪問していることなどから、その印章が「千栄山房主人(館蔵)であることが推察できます。

また、「朱六ノ事種々御手数甚恐入候」からは印泥、押印に使う朱肉についても鷗外が小野に何らかの依頼をしたことがうかがえます。印章と印泥をめぐる一連の物語の一端を伝えていきます。この逸話についての読者・観覧者諸賢の御教示をお待ちしております。

資料は1月25日まで開催のコレクション展「鷗外之印」に出展中です。



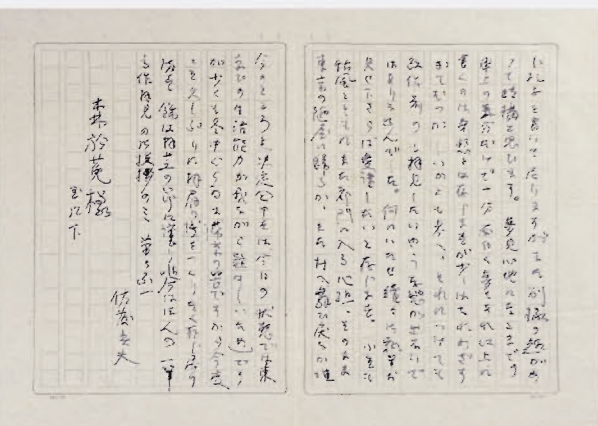
佐藤春夫筆

昭和24年8月17日消印

[407104]

佐藤春夫が、疎開先の長野県から東京の大田区に住んでいた鷗外の長男・於菟に宛てた手紙です。鷗外を敬愛した春夫と、その春夫を慕った於菟との親密な交流の一端がうかがえます。於菟の創作に対する丁寧な批評が中心になっていますが、そこに谷崎潤一郎の名前が出てくるなど、興味深い資料です。

書中の『一夜』とは、於菟が創作した小説ですが、このタイトルからは、鷗外の幻の作品『一夜が思い出されまます。春夫と於菟がそれぞれに記したところによると、鷗外は、妻・志げの強い要請によって、その原稿を破棄してしまっただけのことになっています。鷗外の『一夜』との関係についての研究が待たれます。



於菟の『一夜』は、雑誌「世界人」第8号(昭和24年8月)に掲載されていたものです。昨年、水沼二郎氏によって発掘され、その全文が森鷗外記念会発行の「鷗外」95号(平成26年7月発行)において「資料紹介」として紹介されています。

ベルリン森鷗外記念館30周年を記念して

ベアーテ・ヴォンデ（ベルリン森鷗外記念館副館長）

30年というのは切りのいい数字です。鷗外も好んだことでしょう。『舞姫』にあるように300年は例えば寺院、仏閣、大学など、鷗外にとって「古い」ものの数字です。30年なら「成長」や「独立」でしょう。

今から30年前、素晴らしい翻訳家であり鷗外と同じ60歳でその人生を全うした私の日本学科の恩師ユルゲン・ベルント教授、鷗外の御遺族、長谷川泉教授（森鷗外記念会の当時の理事長）といった方々が協力して、東ベルリンにあったある建物に森鷗外を記念する（記念室）を設立しようとされました。その建物とは、鷗外がベルリンで最初に下宿し、「キタ・セクスアリス」にも登場する建物です。鷗外来独100周年にあたる1984年10月12日、開館式が開かれました。そして、1988年記念館へ発展する第一歩が踏み出されました。私どもの記念館が最初のものでした。森鷗外記念館の長女と言えるかもしれません。津和野はその7年、

後の1995年まで待たねばなりませんでしたが、東京では文京区立鷗外記念本郷図書館内に記念室という形で運営されているに過ぎませんでした。

ベルリン森鷗外記念館は、世界で、唯一現地資本で運営される外国人の記念館です。これは特筆すべきことなのです。建物の外壁に施された「鷗外」の二文字の写真は、ローマ字で「Ogai」と打ってインターネットで検索した時にまずと言っていいほど最初に登場するイメージです。しかも「Herz Mori-Ogai」宛の広告なども記念館に届きます。「鷗外はベルリンっ子だ」と言えるかもしれませんね。ベルリン森鷗外記念館はベルリンの数多くの博物館の中で、一つの「特異な存在」として認識されています。この30年間、世界各国から延べ10万人を超える人が当館を訪れましたが、その大半が日本からの訪問者です。つまり、私どもの記念館ではその大半が、「外国」からの訪問者だと言うことです（文京区立森鷗外記念館が開館して2年、



1984年の開館式の様子 ©Waltraut Harre/MOG



すでに6万人の見学者が訪れたと聞きますが、その中の何人が外国人でしょうか。

木下圭太郎が鷗外をして「テ・エ・ス・百門の大都」と評しました。当館の入り口は一つですが、その入り口をくぐる人は実に多様です。旅行でベルリンを訪れた人以外に、ドイツ国内にとどまらずヨーロッパ、北アメリカ、また中国、韓国など様々な国の大学から研究者や旅行者が訪ねて来られ、様々な相談を受けます。その結果、著書の前書きや後書きに当館の名前を記載してくださった著書も本棚数段分にもなりました。在独あるいは日本からの中学や高校の生徒さんの団体をお迎えして、学校で読んで『舞姫』を始めとする鷗外作品について質問を受けたり、独日交流の歴史について講演することも少なくありません。

当館は様々なネットワークにも積極的に参加しています。例えばドイツ・文学記念館・記念会総連やフンボルト大学研究・教材コレクション会議などです。ベルリンの博物館関係のイベントの「博物館の長い夜」に私たちの館も参加し、深夜2時まで公開ツアーや特別プログラムを催し、一夜で普段の一ヶ月分の来館者を迎えることもあります。90年代初めまでは団体ツアーの方が観光バスで来られていました。今は個人旅行の方も多くなりました。また明治時代にベルリン大学へ留学していた方の御子孫も多く来られます。月1度夕方に行っている学術講演会ではドイツ語で行われることが主なので、ベルリン在住の方々が参加されます。

開館以来今日まで、ベルリン森鷗外記念館の「運営資金」はベルリン・フンボルト大学が担っています。しかし、これは当たり前なことではありません。日本から個人的に当館を支援してくれた友人には感謝してもきれません。そのお返しに、当館はドイツで唯一の日本語のサービスを提供しています。他のどんな立派な博物館でも日本語での案内はありません。しかしこうしたことを続けるには、本来日本側からの出資が必要です。独日で運営資

金を折半することはすでに30年前の開館の時前提条件としてたてられていたはずのことです。

この「ベルリンのなかの日本小島」「憩いの隠れ家」や「ベルリンの観光穴場」と呼ばれるまでに育った独日両国にとつての知的財産をより魅力的な交流の場、鷗外研究の中心にするためには、善意だけでなく積極的な支援が必要です。1984年に私がベルリン森鷗外記念館で働き始めた時、鷗外に興味があるのはきつと年配の方達だけであろうから、10年後には私は新しい仕事を探さないといけないだろうと思っていました。ですから、私が今日まで働き続けていることは大きな嬉しい誤算でした。

来館者のうち、ベルリンでの自分自身の暮らしを先駆者鷗外に映して問う若い人たちがいます。彼らはこの記念館を訪れたことの「意味」を探します。21世紀ほど「現代に生きる」との意味を強く問いつける時代はありません。それぞれの「人生の岐路」「なかじきり」に直面した時、鷗外のデスマスクの前で「自分はどうか生きたいのだろう」「日本はどうなるのだろう」「全てがグローバル化した中で自分の日本人としてのアイデンティティとは」「留学する」とはと自分自身に問い返します。それらの言葉が記念のノートに書き残されています。故郷から1万キロメートル離れたこの地だからこそ、その問いを自らに発するのです。壁に架けられた鷗外のデスマスクはそんな質問に静かに微笑み返します。

2014年10月15日、フンボルト大学本館の大学講堂（セナート・ザール Senatsaal）にて、ベルリン森鷗外記念館30周年記念式典が開かれました。森家代表の森ゆり子さん、成澤廣修文京区長、日本から沢山の方が出席してくださいました。私どもはこのことを大変喜ばしく思い、この場を借りて心よりお礼申し上げますとともに、今後ともより一層の協力を通して相互に発展して行くことを願ってここに筆をおきます。

ベルリンにて 2014年10月

東独時代の鷗外記念館

加賀乙彦（文京区立森鷗外記念館名誉館長）

東ドイツに旅をしたことが二度ある。最初は一九五五年で、ベルリンで中上健次ほか五人の作家と一緒に、国際文学の集いが西ベルリンで開催されたときである。講演会だの晩餐会だの、いろいろな催しがあったときに、二日ほど失礼して、ひとり東側に行き、ワイマール見学をしてきたのだ。二度目は、東ドイツを周遊するセット旅行で、U出版社のS氏と一緒にあった。熱心な鷗外研究者であった医学書院の長谷川泉社長に、先年の秋に、東ドイツで「鷗外記念館」が開館したのだが、今はどうなっているか見て来てほしいと頼まれたのだ。で、S氏と相談して、ベルリンを去る前に、マリエン・シュトラッセの記念館を見に行った。それは幅十メートルほどの道路で、歩道の上まで車がずらりと駐車していた。入口に銅版で、日本の作家森鷗外がここに泊まっていたことがあると書かれていた。アパートは四階建てで、なかなか頑丈にできていた。中に入ると狭い部屋が記念館になっていて、館員と思われる女性が、鷗外のデスマスクのところに案内してくれた。コピーと思われる原稿や岩波の「鷗外全集」が飾ってあった。展示してあるのは、それだけだ。なんだか寂しい感じであった。鷗外記念館の熱心な推進者である長谷川氏から聞いたところによれば、鷗外が借りて住んでいたアパートの二階には日独の文化交流の品物が展示してあるはずだった。が、それを見せたくないかと頼むと、館員女史は、人出がないので、展示品はまだ梱包されたまま置いてある、このつぎはぜひ見てくださいますとこやかに答えた。私は、孤独な環境で、外国の作家のために懸命に働いている彼女に好感を覚えた。

帰国して医学書院の長谷川氏を訪ね、観たまま経験したままを報告した。氏は、イデオロギーの差異にもかかわらず、昔ドイツに勉強に来た人のために、一生懸命に働いている東ドイツの人々の親密な志は嬉しいことだと言った。東西ドイツが統一された今は時代も変わって、日独の文化交流の中心として、ベルリンの鷗外記念館が、鷗外の遺品や、実の原稿や所有している書物の展示を続けているのは素晴らしい。ドイツ人の几帳面で辛抱強い気質で、緻密に整理された書物、写真などの展示がおこなわれているのは嬉しいことだ。

ベルリン森鷗外記念館

30周年記念式典レポート

進藤博文（文京区立森鷗外記念館館長）

フンボルト大学ベルリン森鷗外記念館30周年記念式典が、現地時間の10月15日午後5時からフンボルト大学講堂にて開催されました。華麗な室内装で式典が幕を開け、ベルリン森鷗外記念館のハラルト・ザロモン館長が開会の辞を述べ、30周年記念の挨拶としてフンボルト大学総長ヤン・ヘンドリック・オルバース教授が登壇されました。その後、在ドイツ日本国大使館・宮下孝之臨時代理大使、森家代表森ゆり子氏、成澤廣修文京区長、下森博之島根県津和野町長、北橋北九州市長代理、今川英子北九州市立文学館館長、森鷗外記念会山崎会長代理・高橋修司氏、北九州森鷗外記念会会長出口隆氏が、それぞれご挨拶されました。また、立教大学前田良三教授による基調講演「文化の境界を越えた知識人鷗外」現代におけるそのアクチュアリティ」が行われました。

30年の回顧をベアーテ・ヴォンデ副館長が熱く語り、新たな課題を前にした森鷗外記念館のこれからの展望をハラルト・ザロモン館長が述べられ、式典は幕を閉じました。閉会後には、在ドイツ日本国大使館ならびにベルリン森鷗外記念館のレセプションが開催されました。遠く離れたドイツという森鷗外の留学の地で、記念館が設立され、その記念館が30年間活動を継続していることに深く感銘を受けました。同時に、ベルリン森鷗外記念館を今後何十年も継続させて行くことが重要になってくるのではないかと考えました。現在、館を訪れる来館者の約9割が日本人ですが、ドイツの方々にも森鷗外を広めて行きたいという希望を語ってくれたベアーテ・ヴォンデ副館長。彼女の情熱があつてこそ、30年間も記念館が活動を継続したのだと思います。そんな彼女が「文京区立森鷗外記念館のお客様をぜひベルリンにも連れて来てほしい。ベルリンの街をご案内します。」と語りてくれましたので、いつか現地に行けるツアーが実現できると良いなと考えています。



©Mark Wagner

鷗外、流行へのまなざし

宗像和重（早稲田大学教授）

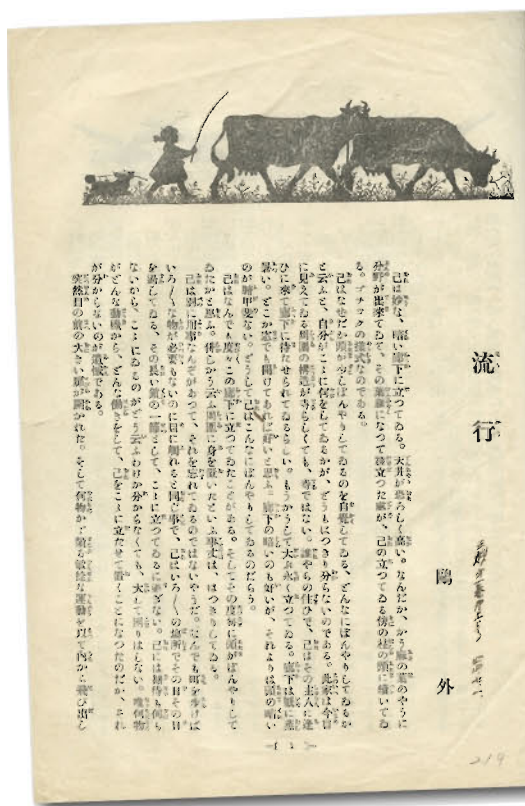
太宰治は戦後の作品「母」のなかで、復員した青年に「僕はこんど軍隊からかへつて来て、鷗外全集をひらいてみて、鷗外の軍服を着てゐる写真を見たら、もういやになつて、全集をみな叩き売つてしまひました」と言わせている。国民を戦争に駆り立てた軍と国家への忌避の言葉だが、「あんな、軍服なんかを着てゐる」権威的で敵めしい姿は、今日でも鷗外のイメージとして定着しているだろう。だから、その鷗外と流行の最先端を行く三越をとりあげた森鷗外記念館のこの秋の特別展「流行をつくる―三越と鷗外―」は、多くの人には意外な組み合わせと感じられたのではないだろうか。実は私もその一人で、初めにこのテーマを聞いた時には、「半信半疑す」（これは鷗外が乃木希典殉死の報に接したときの日記の一節である）という気持ちでもあった。

しかし、すぐに思い出したのは「舞姫」の冒頭近くで、ベルリンの都に降り立った太田豊太郎がまず目を奪われたのは、「胸張り肩聳えたる士官」の凛々しい礼装とともに、「妍き少女の巴里まねびの粧したる」姿にほかならなかった。ちなみに、この一節についてはかつて、ドイツに着いたばかりの豊太郎になぜ女性の服装が「巴里まねび」であることがわかるのか、という疑義が寄せられたことがある。しかしこれは勇み足の疑問なので、「舞姫」が太田豊太郎の回想の手記として書かれていることを失念している。たしかにその時には、ただまぶしく美しい装いとは映らなかったはずだが、その後

のヨーロッパ生活を経て、帰国の途についている今、五年前に見たのが当時のパリの流行を取り入れた最新ファッションだったことに思いあたっているのである。

いずれにしても、生涯の最初の小説に、こうした、理知よりもはるかに情動の立ち勝った太田豊太郎を描き得た鷗外が、敵めしいだけの朴念仁であるはずがない。事実、池内紀氏の編注でこのほど岩波文庫に収録された『椋鳥通信』は、明治四二年三月から雑誌『スバル』に五五回にわたって連載された最新の海外ニュース摘録だが、その第二回目の「一九〇九年二月六日発」には、早くも「巴里流行の婦人服は、色彩より形に重きを置いてゐる。色は大抵黒、白が勝つてゐる。真黒、真白などが多い」と、ファッションから女性の下着の傾向まで見逃してはいない。編者の池内氏が、この通信を「昨日のパリやベルリンのニュースが、すでに今日、東京に届いているにひとしいこと」で、ひとり鷗外にのみできた離れ業というものだったと指摘するように、この時代に、たったひとりインターネットやツイッターをやっていたようなもので、要するに鷗外こそが、文学・芸術から女性のファッションに至る、世界の流行と消息のもっとも早い紹介者だったのである。

当時、「学俗協同」の理念を掲げ、各界名士を糾合して流行を研究する「流行会」を組織していた三越の日比翁助が、鷗外に参加を慫慂したのも、その盛名のみならず、このように卓越した情報の収集・発信力に恃



『流行』「三越」第1巻第5号掲載(明治44年) 館蔵

むところが大きかったからだろう。「日比翁助挨拶に来ぬ」という記事が鷗外の日記に見えるのは、『椋鳥通信』が始まった翌年、明治四三年五月一八日のことであり、さらにその半年後の一月八日に初めて「三越の流行会にゆく」という記事があらわれる。以後、鷗外の日記は八回にわたる流行会への出席の事実を簡潔に記すだけだが、周知のようにこの間、雑誌『三越』に小説『流行』（明治四四年七月）ほかを掲載するなど、鷗外は三越との関わりを深くしていくことになる。

この流行会と関わりをもった時期が注目されるのは、いうまでもなく、一方において鷗外が大逆事件や南北朝正閏問題など、国体に関わる大きな事件の渦中にあつたからにはほかならない。つい先日（二〇一四年一月）の永井愛氏作・演出による二重社の公演「鷗外の怪談」（東京芸術劇場）では、大逆事件の裁判を背景に「あの裁判の弁護の相談に乗っている。その上、なぜか処罰の相談にも乗っている。鷗外の奇妙な立場と苦悩が鮮やかに演じられていたが、「万世一系」の皇統を護持する立場と新しい趨勢に共感し擁護する立場と、――いわば鷗外における不易と流行、武と文、統治と大衆的欲求への

展示報告

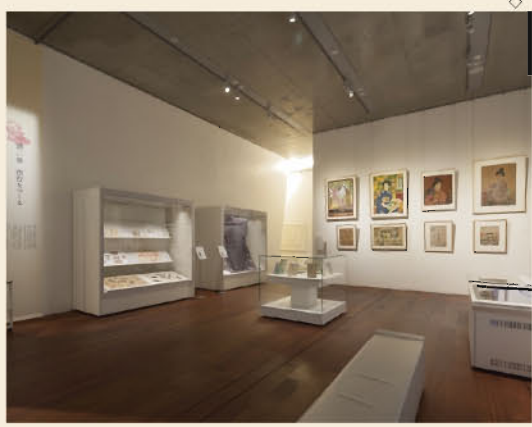
特別展

流行をつくる ―三越と鷗外―

本展覧会では、三越がデパート草創期に展開したPR誌の発行や流行会などの広報文化活動に着目し、三越の歴史を軸に、三越の活動と鷗外との関係を紹介しました。

展覧会ではまず、呉服店からデパートへと変化していく時代、明治38年から大正3年までの三越の歴史をスライドショーで振り返りました。またこの時代は、森家の人々も三越を利用していった時代です。鷗外や鷗

の家族が、日記や作品に記した三越の記憶をパネルで紹介しました。いずれも当時の写真とともに、森家が見ていた三越の風景をご覧いただきました。



展示室で観覧者の関心を最も集めたのは、包装紙やPR誌、ポスター、舞台衣裳などの当時の資料です。鷗外も会員だった「流行会」の知力やアイデアの結晶でもあるこれらの資料が、時を越えて現代の人々も魅了しているのは、今回一番印象的でした。

第二展示室では、三越のPR誌に掲載された鷗外や鷗外家族の作品紹介を中心に、三越と鷗外との接点を展覧しました。日記、書簡、原稿など当館所蔵資料も、三越という視点で見つめなおすことで、意外な人物交流が想起されました。

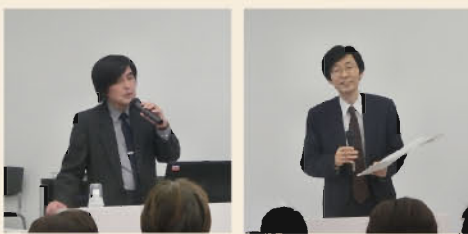
華やかで色鮮やかな三越資料とともに、鷗外が見ていた社会、そして見つけた流行をご覧いただきました。また、「三越と鷗外」という思いがけない組み合わせに、初めて鷗外と出会って下さった方も多かったようです。鷗外が作品に込めた景色や想いが、多くの皆様に届く機会となっておりまして幸いです。

最後に、展覧会開催にあたり、お世話になりました関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。



展覧会期間中に関連講演会を開催しました。

- 左 「三越の近代化と、森鷗外一家」
日時 10月18日(土) 14時～15時30分
講師 和田博文氏(東洋大学教授)
- 右 「明治の文化サロン―森鷗外と「流行会」をめぐる―」
日時 11月16日(日) 14時～15時30分
講師 宗像和重氏(早稲田大学教授)



地域情報

湯島天満宮 梅まつり

2015年2月8日(日)～3月8日(日)

湯島天満宮は雄略天皇2年(458年)創建と伝わる古い神社で、学問の神様・菅原道真を祀り、湯島天神という名でも広く親しまれています。寛文7年(1667年)創建とされる鋳銅製の表鳥居は、都内に残る鋳造のものでは古い時代のもので、都指定有形文化財とされています。また、鷗外の小説『雁』や泉鏡花の『婦系図』の舞台としても有名です。



江戸時代より「梅の名所」として親しまれ、境内に約300本の梅がある湯島天神では、毎年2月に梅まつりが開催されています。期間中は演芸や野点など、さまざまなイベントが開催されます。受験シーズンのこの時期、当館と一緒に巡ってみてはいかがでしょうか。



写真提供：湯島天満宮

◇撮影：コウ写真工房